



Title	日本の「失われた10年」における金融仲介がマクロ経済に与えた影響—理論及び実証分析
Author(s)	石川, 大輔
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47138
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 **いし かわ だい すけ**
石 川 大 輔

博士の専攻分野の名称 博 士 (経済学)

学 位 記 番 号 第 20740 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 18 年 12 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

経済学研究科経済学専攻

学 位 論 文 名 **日本の「失われた 10 年」における金融仲介がマクロ経済に与えた影響
—理論及び実証分析**

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 筒井 義郎

(副査)

教 授 本多 佑三 教 授 小川 一夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、「失われた 10 年」(日本経済の 1990 年以降の長期停滞)における金融仲介がマクロ経済に与えた影響を解明し、処方箋となる政策を提案することを目指している。本論文の背景には、バブル崩壊以降の地価と株価の急落により銀行部門と企業部門のバランスシートが毀損し、その結果銀行貸出市場が低迷し、それが景気や社会厚生に悪影響を与えたのではないかという著者の直感がある。本論文は、この直感が正しいかどうかを厳密な理論・実証分析により確かめ、90 年以降の日本経済をより深く理解することを試みている。

この目的を達成するため、本論文は以下のような順序で理論的・実証的な分析を行っている。第 1 章においては、90 年以降の日本経済における金融仲介とマクロ経済の関係に係る議論を整理している。具体的には、(i)金融仲介が景気(GDP)に与える影響に係る経路を理論的に整理し、(ii)日本の 90 年以降の金融仲介や景気変動に関する状況をデータで確認し、(iii)この分野に関する先行研究を概観している。

第 2 章と第 3 章においては、90 年代の日本の銀行貸出市場が低迷した原因を探っている。第 2 章では、マクロの時系列データを利用し、資金の供給側(銀行部門)について分析している。具体的には、銀行の異時点間の利潤最大化行動から導出された動学的なオイラー方程式を推定し、90 年以降における銀行部門の、具体的には自己資本比率の低下で表されるようなバランスシートの悪化(著者はそれを脆弱性と呼ぶ)と銀行貸出の低迷との関連を分析している。構造変化テストを適用することにより、長引く景気の低迷による銀行部門のバランスシートの悪化は、1996 年 9 月以降において貸出供給を減少させたことを明らかにしている。

第 3 章では、企業のパネルデータを使って、資金の需要側(企業部門)に関する分析を行っている。具体的には、ポスト・バブル期の 90 年代に日本企業が抱えた過剰債務が、銀行に対する借入需要に対して負の影響を与えていたか否かを検証している。その結果、銀行借入需要に対して、企業の売上高は正、企業の社債市場へのアクセスの程度は負、そして過剰債務は負、といった影響を有意に及ぼしていたことを明らかにしている。

第 4 章においては、都道府県別のパネルデータを使って、銀行貸出が景気に与えた影響を分析している。具体的には、自己資本比率、貨幣需要ショック(預金の予期せぬ増加)を銀行貸出の操作変数に採用することで、それらの変数が銀行貸出額を通して景気にどのような影響を与えていたのかを検証している。その結果、銀行部門のバランスシートの悪化による貸出供給の減少は、景気を悪化させていた可能性が高いことを明らかにしている。

第5章においては、銀行貸出市場の低迷に起因する景気の停滞を解決するための政策として、税金による銀行への公的資本注入を取り上げ、その政策効果に関する分析を行っている。具体的には、動学的最適化問題を解くことでマクロ経済モデルを構築し、政府が人々から税金を徴収して銀行の資本に注入するというシナリオの下でカリブレーションし、この政策の効果を社会厚生観点から数量的に評価している。その結果、銀行部門に公的資本が注入されると、貸出供給が増加して企業の設備投資が誘発されるが、長期的には、その投資によって資本ストックを蓄積することが、社会厚生を改善しない場合もあることを明らかにしている。

最終章では、全ての実証結果をふまえ、考えられる望ましい政策を検討している。

本論文における以上の分析結果は、とくに90年代の後半において、銀行部門のバランスシートの悪化が貸出供給を抑制し、それが景気に悪影響を及ぼした可能性を示唆している。したがって、公的資本の注入や不良債権処理の促進などを通じて銀行部門の悪化したバランスシートを改善することが、少なくとも短期的には望ましい政策であると主張している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の1990年代の不況を銀行貸出の観点から分析している。とくに借り入れ側の分析を行っている点や経済全体のモデルをカリブレーションしている点が新しい。明確な問題意識をもち、厳密なモデルと実証方法を用いて分析し、明確な実証結果を得ている点が高く評価できる。したがって、本論文は、博士（経済学）の学位に十分値するものであると判定する。